

青髭 2 3

明宏訊

朝食を前にしてルイは武装を解く必要があると、その場を辞した。

アネモーネは、アデライードと目が合うなり優雅な仕草で口を開いた。

「私の分もご用意していらっしゃるかと……、それではまるであらかじめわかっていたようですね」

「……！？」

理不尽なことに自分の方にお鉢がまわってきたものだから、アンリは思わず無言で主君に抗議した。

「いくら地方貴族といっても、食費に困るほど貧乏ではありませんわ」

「これは失礼……」

しかし、なんということだろう？とアンリは主君を見上げる。あれほどの戦闘をこなしておきながら全く息が上がっていない。自ら何重ものハンデを課しておきながら、である。上級貴族とは、どれほどの戦闘能力を保持しているのだろうか？手のひらを向けただけで一国が灰燼と化すとは単なる比喩ではなかったのか。そうなると、あの啓蒙主義者どもの言っていることもあながち絵空事ではない、ということになってしまう、かもしれない。

そこまで思考を進めて、大声で叫んでいる連中のどれをとっても、ナルボンヌをはじめとする大都市にパンフレットをばらまいている愚か者ども、というかごくつぶしどものことだが、メンバーに大貴族は見当たらないことに気付いた。

もっとも、ことの表面で騒いでいる背後にはかならず黒幕が糸を引いているもの。王の取り巻き意外に、姿を現さない大貴族のいずれかが息をひそめているはず、とは、亡き父親のノートからの引用である。

それに、ここ50年というものの戦争らしき戦争は起きていない。発生して、自分たちとおなじレベルの貴族たちの小競り合いにすぎない。あくまでも歴史を後世から俯瞰してみた、頭でっかちな空論にすぎない、というのがアンリの視方である。

しかも、アンリと同じ世代どころか、もっと若い者までもものが、執筆メンバーに名を連ねている。彼らがその大多数なのだ。

ブーリエンヌ女侯爵の屋敷でそういう貴族たちと出会ったことがあるが、思い出ただけでも軽薄さが思い出されて、口の中に風船を突っ込まれた気分になる。

居間に赴くと、朝食どころか、一年に一回か、二回ほど開くほどの晩餐会とでも思わせるほどに豪華な席ができていた。主君と母親は以前から話を合わせていたのか？思わず、アネモーネに視線を向けると、彼女は、さきほどの娘時代に戻っていた。あきらかにあわてている。

「これは立派なおもてなしですね……大変に恐縮いたします」

「いえ、昨晩は農奴たちの争いの問題でいろいろと処理が立て込んでいましたのでなかなか寝られなかったのですよ。それを突然に、野蛮な、これは失礼、名誉ある騎士同志の戦いで叩き起こされ……二重に失礼、そのようなお客様ですから、貴族というものの礼儀をお教えして差し上げようと頑張ったのですよ、あらこれは訂正、頑張ったのは侍女たちですけど……」

まったく長広舌がすぎる、というものだ。アイロニカルな言葉の数々に伯爵も返す言葉を見つかられないようだ。

ようやく安心したところを見計らったのか、アデライードは尽かさず付け加えた。

「さきほどの農奴たちの諍いですけど、ある人が勝手に解決なされてしまいました」

「それは兄上の仕事と聴いていますが？」

ギョームである。どうやら酔いは多少なりとも解けてきたのか？アンリは、その美貌を見定めてみる。

さすがは知性の人である。こと、話がそのような方向にむけば本来の能力が鎌首を擡げるのだろう。

「ナルボンヌの意向を聴いてのことだと？」

その瞬間に主君の目が険しくなったのを見逃さなかった。それはアンリも考えもしなかったことだ。王とその取り巻きたちは、諸侯が平民の軍隊を作るとを奨励している。とりもなおさず青い血が流れないことを意図してのことだが、上はともかく、下までそのような思想が行き届くのか、アンリは疑問である。

主君の表情は、表向きは美しい塑像だが、その内幕で海洋のように潮の流れが目まぐるしく変わる。さいきん、アンリもわかりかけてきた。

居間までの長い廊下はまだ早朝の青い吐息を残している。鏡のように磨かれた床は、上を歩く人々の内面まで映すのだろうか？有象無象の世の中、世界から比べたらこのように狭い空間でさえ、それも約二名を除いて家族同士だというのに、いろいろな考えをもつ人々が同居している。発する足音はそれほど変わらないのにそれぞれが考えていることはまるで違う。

どうやら、伯爵は弟の知性に食指が動いたようだ。二人の会話は弾んでいる。彼が得意な分野に心を向けることで、恋愛を今しばし忘れていたのだろう、あくまでもいまのうちは。

17歳の美少女の声は、ギョイエンヌ城の彫刻の隅々までゆきわたり、普段よりも露っぽさを増しているように見える。

「…ということで、あなたはナルボンヌの意向を疑問視しているわけですね」

「ええ、システムチックな方向に歴史の舵を取ることは、表面的、一時的には有益ですが、何百年という長いスパンから見ると、必ずしもそうではないようにお見受けします」

「システムチックとはあなたの造語ですね、制度が人を縛ると同意語だと思ってよろしいか」

「ええ、アネモーネ殿は兄上よりもよほど頭の血のめぐりがよろしいとお見受けします」

どうやら、この家の長兄は末の弟を買い被っていたと後悔した。かたちのいい頬を見てみればいい。あれほど美しい顔がだいなしだ。恋という酒で酔っているのが見て取れる。上気して声までもが上ずっているではないか。

「ギョーム、言葉がすぎるぞ…」

ここは兄の沽券を守護しなければならないと、朝食の用意ができている居間に半身が入るなり、アンリは言葉を険しくしてみせた。しかし、知性の弟はそれをまったく意に介さない。そして、主君はそのような彼に興味を持ち始めているのが見て取れる。まったく面白くない。

ギョームは兄を無視するように言葉を畳み掛ける。

「本当に陛下のご意思なのかよくわからないところが難しいですが、ナルボンヌが向かっている先は虚無が支配する世界のように思えます。法則が支配するだけの、人間が不在の荒野です」

「……？」

弟にこれほど修辞法を熟す趣味があるとは思わなかった。いささか知性が勝ちすぎて文章表現などに気を使わないことが気に係ってはいたのだが、女性を相手にするとこれほど変わるものなのか。

「しかし、それは歴史的な時間感覚によるものでしょう。ここ10年ではどうでしょう？」

「ナルボンヌの方針のいい面ばかりが目立つでしょう、薔薇十字軍以降、流れる青い血の量も、それだけでなく質までもが減少しました。後者にあっては皆無とっていいのです。しかし、それを賤民たちに代用させる、というのはどうでしょう。まさかこれほど短期にろくでなしたちの思想が現実化するとは思ってませんでした。どうやら、時間の流れは加速度を増しているのかもしれない」

「そうなる、あながち、歴史的感覚と言ったのは誇張かもしれぬ、と」

「アネモーネ殿？」

伯爵の顔がやや本気の色を為してきたことが意外だったのだろう。心のどこかでは、彼がこれまで見知ってきた女性と違うことに違和感を隠しきれないようだ。それもそうだ。弟が相手をしているのは、彼よりもはるかに年長の、それも主君たるカルッカソム伯爵なのだから……。

事実を知ったときの弟の顔を想像して、アンリはおかしくなったが、それを露わにするわけにはいかない。

長い食事用テーブルの、客用の席をギョームは伯爵に勧める。貴族の、男が女に示す礼儀作法に従って音を立てずに椅子を引き、片手を背もたれに軽くかけて、もう一方の手のひらをやや上方に向ける。なお、上半身は首を真正面に据えたまま、腰だけを折り曲げて45度の角度を作る。

「……」

兄ながらに弟を美しいと思ってしまった。すぐに、そんな自分を殴りたくなってしまふ。いまままで弟を笑っていたが、その嘲りには自分にこそ向けられるべきかもしれない。アンリはそんなことを思いながら主人の席についた母親に視線を向けた。

この人はいったい何を考えているのだろう。誰かが仕掛けた演劇ならば、とくと最後まで見通してやろうと意気込んでみる。だが、その空しさに思わず苦笑したくなる。この部屋でもっとも大きな絵が視野に飛び込んできた。神話における青い血と赤い血の邂逅をテーマにした、200年ほど前の作品だ。子どものときは、賤しい賤民が貴族の家を飾る絵にかきこまれていることは不思議でたまらなかった。それをたまたま珍しく家に姿を見せていた父親に質問してみたことがある。

何か用があつてのことらしく、「勉強しなさい。そうすれば城に上がれるころにはわかるだろうよ」と食事も、大半を残したまま部屋を後にしてしまった。

その答えは父親の言が実現した今となっても、何も解決していない。むしろ、疑問は空に向かって無数の葉をつけるどころか、地下に向かって巨大な根っこを伸ばしつつある。

しかし、それに直面しつつあるのは、アンリだけではなかった。現実的な面において、誰にも適切なアドバイスも受けられずに事に衝突しているものがある。

ギュスターブ・ペリゴールである。

当の本人は、ちょうど武装を解いて引き返してきたルイが否応なしに連れてきたのだ。ギュスターブにしても、先ほどの天神のような戦いぶりを見せつけられては反応しようもなかったのだろう。ルイは、アンリたちも知ってのと通りの性格ゆえに、相手が自分の要要求に否定をしなければ肯定と答える、いわば、頭に花が咲いている天真爛漫な性質である。

アンリは心底からこの馬面の青年を哀れに思った。今回のこともそうだが、伯爵も人が悪い。高貴な人間のやることはやはりわからない。彼にしてみれば、賤民にすぎない自分にルイを含めたこの場の貴族たちがどうしてここまで丁重に扱うのか全く理解できない。

ルイは、無理やりに連れてきたといっても、彼にしてはありえないくらいに態度が穏便である。彼は豪放磊落な外見からは想像ができないだろうが、幼いころから母親に厳しく躰けられたことも手伝っているが、かなりの内弁慶なのだ。外部の人間には、他人に著しく警戒心を抱かせるほどに馬鹿丁寧な態度を示す。